

入学式 告辞

筑後川沿いの桜や菜の花に心が和む今日のこの佳き日に、ご来賓の皆様のご臨席を仰ぎ、平成28年度久留米工業高等専門学校入学式を挙げてまいりますことは、教職員一同にとって、まことに慶賀の至りであります。ご多用中のところ、ご来臨賜りましたご来賓の皆様には、高いところからではありませんが、厚く御礼申し上げます。

本科並びに専攻科の入学生の皆さん、留学生の皆さん、ご入学おめでとうございます。難しい試験を突破して今日の日を迎えられた皆さんの才能と努力に深く敬意を表します。また、これまで入学生の皆さんを支えて来られた保護者の皆様にとりましても、本日のお慶びは如何ばかりかと存じ上げます。重ねてお祝い申し上げます。

一昨年度、本校は、その前身の久留米高等工業学校の創設を創基として、そこから75周年、現在の工業高等専門学校の創立から50周年を迎えました。これまで本校が輩出した1万3千余の卒業生・修了生は、同窓会活動を通して豊富な人脈を築き上げつつ、国内外の各方面において、エンジニアとして、社会人として立派に活躍されています。皆さんは、先輩たちのご活躍を将来の自分の姿としてイメージし、これからの勉学の励みとしてください。

久留米高専は、「自立の精神と創造性に富み、広い視野と豊かな心を兼ね備えた、社会に貢献できる技術者の育成」を教育理念としています。「自立の精神」(Spirit of Independence)を土台にして、その上に、「創造性」(Creativity)、「広い視野」(Broad Vision)、「豊かな心」(Humanity)を育み、社会に貢献できる技術者を育成するという教育理念は、「技術者の木」として、分かりやすく絵で示されています。皆さんは、これからいろいろなところで、この絵を見かけるかと思えます。その絵を見ながら、久留米高専の教育は何を目指しているのか、他方、久留米高専の教育を受けることによって、皆さんにはどのような資質が身に着いていくのか、また身に着くことを期待されているのか、ということについて考えてください。

久留米高専は、大学と同等の高等教育機関であります。本科に入学された皆さんは、今日から、「生徒」ではなく「学生」と呼ばれることとなります。そこで大切なことは、「自立」と同時に「責任」であります。そのことを常に忘れずに、学生生活を送ってください。

久留米高専の学生としての最大の「責任」は、高校初年程度から大学工学部卒業レベルまでのエンジニア育成のための教育のプログラムに沿って、一歩ずつ着実に専門科目を修得することです。そこでの教育の方法論の特長は、実験・実習・演習などの実践的な科目を重視していることです。しかし、実践は実践にとどまりません。そこで得た知識・技術は、理論としての講義科目、いわゆる座学によって検証・裏付けられ、さらに高いところへの認識へと進んで行きます。こうして、実践から理論へ、理論から実践へ、さらに実践から理論へと、スパイラルアップ(善循環)しながら、創造、すなわち、新しい価値を持った「ものづくり」の精神が生まれて行きます。そして、これこそが「高専スピリッツ」と称されるものであり、高専の卒業生・修了生が、企業においても、大学においても、高く評価されている所以でもあります。

ここで、課外活動についても触れておきます。IPS細胞の研究でノーベル医学・生理学賞を受賞された山中伸弥先生がマラソンを愛好されていることは有名ですが、実は、山中先生が中学校から大

学の2年生までの8年間、部活動として柔道をされていたことは余り知られていません。

山中先生には、お父様の教えに従ったことが2つあるそうです。その1つが柔道で、もう1つが医者になることで、その2つは、その後の人生で一番大きく影響したと語っておられます。

柔道については、

「研究は本当に単調な日々の繰り返しなんです。…待ち時間がものすごく長いんですね。へたをすると1年くらいかかる実験がたくさんあって、しかも圧倒的に失敗に終わることが多い。それでも、何年かに一度ものすごく嬉しいときがある。まさに柔道と一緒になんです。この単調さに耐えなければいけないということで、とてもあの頃のことが生きています。」(『まいんど』創刊号 2014年10月)

と回顧されています。

「試合という年に何回か自分を発揮する機会」を除いて単調な日々の繰り返しであった部活動としての柔道がその後ノーベル賞に至る研究に大変役に立ったと述べられている訳です。

また、柔道を通して、生涯大切な教えを乞えるような素晴らしい指導者にも出会うことができた感慨深げに語っておられます。因みに、大学の3年生からはラグビーをおやりなったとのこと。

入学して間もない頃から大学受験を意識せざるを得ない高校生に比べて、高専生にはみっちり課外活動に打ち込める時間と環境があります。久留米高専には、文科系、理科系のいろいろなクラブの他に学生会や寮生会などもあり、課外活動は全体として非常に活発です。それらの活動に是非とも参加して、山中先生がそうであったように、自分自身の興味・関心や個性を伸ばすとともに、人間力を鍛え、先輩や後輩、同級生、そして教職員とのコミュニケーションを深めて行ってください。

最後に、吉田松陰や西郷隆盛等にも思想的な影響を与えたとされる江戸時代後期の儒学者佐藤一斎の言葉を引きましょ。

佐藤は、その著『言志後録』の中で、「一の字、積の字、甚だ畏るべし。善悪の機も初一念に在りて、善悪の熟するも積累の後に在り。」と述べています(佐藤一斎著・川上正光全訳注『言志四録(二)言志後録』)。

「一の字」とは物事の最初、「積の字」とはその積み重ねを意味しています。また、ここで言う「善悪」を「学問の成否」に置き換えて、口語訳を施してみると、

「物事の最初と積み重ねは、畏れなくてはならない。学問の成否のきざしは、学問を始めた時の強い思いにあり、学問が実るか実らないかも、その思いの積み重ねの結果である。」

ということになるでしょう。

入学生の皆さんが、強い思いを抱いて久留米高専での学業を始め、その思いを途切らせることなく、日々研鑽と努力を積み重ね、日本の未来を担うエンジニアとして、大きく、たくましく成長していかれる姿に思いを馳せて、本日のめでたきご入学に際しての校長告辞を結びます。

平成28年4月6日

独立行政法人 国立高等専門学校機構

久留米工業高等専門学校長

三川 譲二